

## 地政学と言説

——アメリカの外交政策にみられる実践的な地政学論——

ジェロイド・オツアセール\*、ジョン・アグニュー\*\*

(森崎 正寛\*\*\*・高木 彰彦\*\*\*\* 訳)

Gearóid ÓTuathail and John Agnew  
Geopolitics and discourse:  
Practical geopolitical reasoning in American Foreign policy  
*Political Geography*, 11, 1992, pp. 190-204.

© 1998 by Elsevier Science

**要旨** 本稿は、言説概念を使用して地政学の再概念化について論じる。地政学は、国政に携わる識者が国際政治を「空間化」し、それを特定のタイプの場所や人々、劇的な事件によって特徴づけられる「世界」として表象する言説的实践として定義される。「公的」な地政学と「実践的」な地政学との峻別を含めて、こうした再概念化を説明する四つの命題を簡単に述べる。これらの論点は、アメリカ合州国の外交政策にみられる実践的地政学論を一般的に論じることによって説明される。これらには、ソ連を表象するジョージ・ケナンの「長電報」と「ミスターX」論文の分析が含まれる。このように場所を地政学的に表象することは、社会的実体としての場所の多様性と複雑性に関する真の地理的知を無効にしてしまう。そして皮肉にも、地政学論は反地理的であることによって作用すると結論づけられる。

メアリ・カルドアMary Kaldorが最近述べているように、冷戦とは常に言説すなわち「資本主義」対「社会主義」という言葉の闘いであった (Kaldor, 1990)。カルドアは、東ヨーロッパの人々が常に言葉のもつ力をどれほど強調するのかを示すとともに、われわれが世界を描く方法やわれわれが使う言葉が、われわれの世界の見方や行動様式をいかに形作るかを述べる。世界の記述は地理的な知をとめない、冷戦という言説は一連の地理的記述を秩序づけ、そうした記述によって冷戦の言説は戦後の国際政治を表現したのである。民主主義的な「西側」と恐るべき拡大主義者の東側との間の大闘争という単純なストーリーが、この時期に最も影響力があり、持続した地政学的脚本であった。今

日では時代遅れに思われるこのストーリーは、中央ヨーロッパではなく、異国情緒あふれる「第三世界」の場所、すなわちアフリカの角にあるオガデンの砂漠地帯からエルサルバドルの山々、ヴェトナムのジャングル、アフガニスタンの谷間に至るさまざまな場所で演じられたのである。もちろん、その筋書きはいつも単純であるわけではなかった。そこには複雑で微妙な違いが認められ、そのことが戦後の世界を動的で劇的なものにし、時には皮肉なものにもした。たとえば、人種差別政策をとる南アフリカ政府に支援された黒人のUNITA (アンゴラ全面独立民族同盟) 軍に対してキューバ軍がガルフ石油の施設を守るというのは何という皮肉であろう。しかし、そのストーリーは、「東—西」に分かたれたいずれの側にも巨大な軍産複合体を成立させ、全世界的に二者択一的な政治的实践の可能性を厳格に規律づけたのである。つい最近まで、すべ

\* リヴァプール大学 \* シラキウス大学  
\*\*\* 茨城大学・院 \*\*\*\* 茨城大学

ての地域紛争はこうしたストーリーの言い回しと論理に従わざるをえなかった。今やこのストーリーを解明し、その地理を曖昧にするとともに、地政学的な装いを見せる冷戦がどのように成立し作用したのかを問うときである。

本稿は、そうした疑問に直接答えようとするものではない。むしろ、それに答えるための概念的な基礎を確立しようとするものである。本稿は、言説によって地政学の再概念化の輪郭を示し、これをアメリカの外交政策の一般的事例に適用しようとする。地政学とは言説ではなく、もともと実践的なもの、すなわち他の勢力に対抗する行動に関するものであり、侵略、戦闘、軍事力の展開に関するものである、と主張する人もいる。そのような実践は確かに地政学的ではあるが、海軍の創設や外国への侵略決定を意味づけ正当化するのは言説を通じてだけである。言説を通じて指導者は行動し、何らかの単純な地理的理解を用いることによって外交政策の行動は説明され、既成の地理的先入観による理解の仕方を通じて戦争に意味が付与されるのである。社会的に構造化された言語の使用を通じて、われわれはこの社会的世界を理解し構成する (Franck and Weisband, 1971; Todorov, 1984)。政治演説やそれに類するものは、世界政治に影響のあるアクターの自己理解を再発見する手段となる。それらは、われわれが社会的に解釈された世界とそこに見られる地理的知識の役割を理解するのに役立つ。

本稿は、二つの部分から構成される。第一の部分は、言説概念を使用することによって一つの地政学理論を描こうとするものである。そこでは、言説的用語で地政学を概念化することの意味合いに関して、四つの示唆に富んだ命題が簡単に示される。第二の部分は、アメリカ地政学の問題に焦点をあてるとともに、アメリカの外交政策が国際政治の一つの地理を書こうとしてきた実践的な地政学論に一貫して見られる何らかの特徴を説明する。そこでは、冷戦の起源となった最も有名な二つのテキスト、すなわち、ジョージ・ケナン George Kennanによる1946年の「長電報」と1947年の「ミスターX」論文を詳細に分析する。これらの影響力のあるソ連の地政学的表象にみられる皮肉は、それらが具体的な地理的表象ではなく、適度に限定された非歴史的な抽象概念であったことである。本稿で示そうとするのは、こうした地政学論のもつ反地理的な特

性である。

## 地政学と言説

多くの人が指摘するように、地政学は定義するのが難しいことで有名な言葉である (Kristof, 1960)。月並みの学問的理解では、地政学とは国際政治の地理、特に自然環境 (位置、資源、領域など) と外交政策の行為との関係に関するものである (Sprout and Sprout, 1960)。地政学的伝統のなかでは、この言葉はさらに明確な歴史と意味もっている。19世紀末における地政学の誕生からコーリン・グレイ Colin Grayなどによるその今日的な用い方に至るまで、地政学記述に一貫して見られる歴史的特徴は、地政学が理想主義やイデオロギー、人間の意志に対立するという主張である。この主張は地政学的伝統において長らく主張されたもので、その発生期から、偉大な指導者と人間の意志のみが歴史や政治、社会の進路を決定するという主張に対抗するものであった。そこではむしろ、自然環境や国家の地理的な位置関係がその運命に大きな影響力を与えるとして主張されたのである (Ratzel, 1969; Mackinder, 1890)。カール・ハウスホーファー Karl Haushofer は、ゲオポリティク Geopolitik 研究とは「すべての政治的事象が自然環境という不変的な条件に依存する」ことを示すものであると論じた (Bassin, 1987, p. 120)。1931年のラジオ演説で彼は以下のように発言した。

…地政学が政治的情熱に取って代わり、自然法に従う発展が人間の意志によって恣意的になされた行為を作り変えるのです。剣や熊手でむなしく打ちのめされてきた自然的世界は、大地に直面してこらえきれずに自ら再主張します。これこそが地政学なのです。

(Bassin, 1987, p. 120 において引用されたもの)

地政学自体の理解と言い回しによれば、地政学とは、確たる真実や物質的な現実、抑制できない自然的事実といった領域だとされる。地政学者たちは、地政学的分析が客観的な唯物論と思われることにつけこんできた。グレイ (Gray, 1988, p. 93) によれば、「地政学的分析は、特定の政治システムとか哲学といったものには偏らない」のである。それは国際政治の基礎、すなわち国際政治の諸事件がそれを巡って展開するような永久不変の地政学的現実を扱うものである。これらの

地政学的現実、外交政策の不変的で物質的な決定要素であるとみなされる。そのような図式のなかでは、地理は非言説的な現象だとみなされ、国際政治の社会的、政治的、イデオロギー的次元とは別個のものである。

しかしながら地政学的記述の最大の皮肉は、それが常にきわめてイデオロギー的で深く政治化された分析形式であったことである。ラッツェルRatzelからマッキンダーMackinder、ハウスホーファーからボウマンBowman、スパイクマンSpykmanからキッシンジャーKissingerに至るまで、地政学理論が客観的で公平なものであったためしはなく、こうした公的な識者の政治哲学や政治的野心という生来的なものであった。地政学の記述形式がこれらの著者によって変わるのに対して、地政学理論を生み出す実践には共通のテーマが見られる。それは、国政府の実践、さらには国家権力を援助する知の産出である。

政治地理学においては、そのような理解の仕方に対する伝統的な抵抗から、地政学的伝統は長い間反対されてきた。そうした抵抗につきまわってきた重要な問題は、地政学的記述には首尾一貫した総合的な理論が欠けていることと、国際政治の動きを特徴づける幅広い空間的实践に関連してきたことである。本稿では、言説概念を使用して型にはまった地政学の意味を再概念化することによって、そうした総合的な理論を提示する。われわれの基本的前提となるのは、地理学とは政治とイデオロギーの諸問題に常に深く関わる社会的歴史的言説であるという主張である(Ó Tuathail, 1989)。地理学は、イデオロギーや外部政治から分離した自然的で非言説的な現象では決してない。むしろ言説としての地理学は、権力/知そのものの一形式なのである(Foucault, 1980; Ó Tuathail, 1989)。

われわれが示そうとするのは、特定のタイプの場所や人々や劇的な事件によって特徴づけられる「世界」として地政学を表象するようなやり方で、国政に携わる識者が国際政治を「空間化」するような言説的実践として、地政学が批判的に再概念化されるべきだということである。われわれの理解するところでは、地政学研究とは、中核諸国や覇権的諸国による国際政治の空間化の研究である。この定義は注意深く検討する必要がある。

言説という概念は、今日の批判的社会科学、とりわ

けフランスの哲学者ミシェル・フーコーMichel Foucaultの著作に触発された分野において重要な研究対象となってきた(MacDonell, 1986)。国際関係論においては、言説概念を国際政治の実践に関する研究に組み入れようとする一連の試みがなされてきた(Alker and Sylvan, 1986; Ashley, 1987; Shapiro, 1988; Der Derian and Shapiro, 1989)。ダービィ(Dalby, 1988, 1990a, 1990b)とオツァセール(Ó Tuathail, 1989)は、言説概念を政治地理学に拡大しようと試みている。人々がもつ可能性の集合として、人々がその世界や活動についての意味を構築する際に用いる社会・文化的資源の集合として、言説は最もよく概念化される。それは、単に演説や文書による声明ではなく、それによって口頭の演説や文書による声明が意味づけられるような規則である。言説によって、人は書き、話し、聞き、活動することを意味づける。それは、読み手や聞き手、演説者や聴衆が聞いたり読んだりするものを理解し、それを意味のある組織化された全体へと構築することを可能にするような可能性や規則の集合である。アルカーとシルバン(Alker and Sylvan, 1986)は以下のような方法で相違点を表明する。

背景として、言説は読み手や聞き手を結びつける単なる言葉とは区別されなければならない。われわれがこの言葉を好んで用いるほどには、人々は言説を読んだり聞いたりしない。むしろ、単なる言葉を読んだり聞いたりする過程で言説を使う。われわれが見るものは人々と単なる言葉であるといった風に、言説そのものが表れることはない。

文法のように、言説は虚構的な存在であり、現実的な存在ではない。それらは、「構造」が時々表われるような様式のアーチ型構造物ではない。むしろそれらは、われわれのもろもろの活動やテキスト、演説における実感から、われわれがその存在を推論するような可能性の集合である。それらは必ずしも決定論的というわけではない。言説が可能にするのである。こうした可能性や規則を、一定の可能性が現実化されるような過程としての理解や、何らかに区切られた可能性の場を許容するものとみなすことができる。可能性の多様な実現は、言説をさらに再生産し変化させるという結果をもたらす。一つの可能性を実現することは、以前に存在した可能性を閉じると同時にやや異なる新しい可

能性を開くことである。言説は決して静的なものではなく、人間の実践によって絶えず変化し修正される。それゆえ、言説的用語で言うと、地政学研究とは、それによって国際政治の地理が書かれるような社会・文化的資源と規則に関する研究となる<sup>1)</sup>。

「国政に携わる識者」という概念は、国政の諸活動を評論し、それに影響力を与え、遂行する世界中の国家官僚、指導者、外交官、外交助言者といった人々の集団全体のことを指す。16世紀における近代国家システムの発展以降、こうした国政に携わる識者の集団がみられるようになった。20世紀までは、この集団はかなり小さく限られたもので、彼らの多くは国政の実践者でもあった。しかしながら20世紀中に、この集団はかなり大規模になり、内部的に専門化するようになった。少なくとも大国においては、制度的な設定と理解の仕方のスタイルとに基づいて国政に携わる識者のタイプを区別することが可能である。市民社会の中には、特定の防衛請負業者や兵器システムと関わる「防衛に携わる識者」がいる。また、国際問題や国際戦略について論じたり批評したりする（たとえば、ランド研究所、フーバー研究所、ジョージタウン戦略国際研究センターなどの）様々な公的なシンクタンクにも安全保障に携わる識者という専門家集団がみられる（Cockburn, 1987; Dalby, 1990b）。かつて政府高官のトップとして、全国新聞や外交専門誌において自らの意見を幅広い読者に浸透させたヘンリー・キッシンジャーHenry Kissingerやズビグニュー・ブレジンスキーZbigniew Brzezinskiといった公的に国政に携わる識者とは異なる知識化の形式を認めることができるのである。政治社会そのものにおいても、トップにおいて外交政策の青写真を作り、考えを表明し、命令を下す人々から、特定の外交政策を履行し、日常レベルの（外交であれ軍事であれ）国政の実践に実際に関わる人々まで、外交政策に携わる人々の集団も多様である。したがって、すべてが国政に携わる識者であると主張できる。なぜならば、識者たちは絶えず国政を論じるのに携わってきたからである。もっとも、すべてが識者という機能をもつというのはありきたりの意味においてではなく、むしろグラムシGramsciのいう「有機的」識者という意味においてであるが（Gramsci, 1971）。

理解の仕方の過程と国政に携わる識者についてこれまで述べたことから、われわれは四つの命題を提示し

たい。第一の命題は、われわれが定義したように、地政学研究とは社会的実践の集合としての包括的な国政研究に関わるものだというものである。地政学は、古典的な地政学の言葉で語る「賢人」の小集団だけに限定された、個別的で相対的に抑制された活動ではない。単純に言えば、地政学に携わるということは外交政策の問題を述べることである。というのも、人は暗黙のうちに特定の世界観を標準としているからである。また、地政学論を「国際政治」が生じる背景や舞台装置の創造とみなすことも可能だが、それは単純すぎる見方であろう。そのような舞台装置の創造自体が世界政治の一部なのである。この舞台装置そのものは単なる背景以上のものであるが、しかしそれは世界政治のドラマの活発な構成要素でもある。ある場所について述べるということは、単に位置や舞台装置を規定するにとどまらない。それは分類可能な範囲を広げることであり、物語や主題、適切な外交政策反応といった一連のものを誘発することである。ある地域を「イスラム的」と言うだけで、暗黙的な外交政策を示すことになるのである（Said, 1978, 1981）。異なった場所や全く同じ場所を「西洋的」と述べるだけで（たとえば、エジプトに対して）、競い合う外交政策の担当者たちを暗黙のうちに操作することになる。地政学論はきわめて単純な段階ではじまる。それは国際政治の実践の普及版である。それは本質的に政治的な表象過程であり、そうした表象によって国政に携わる識者が世界をデザインし、あるドラマや主題、歴史、ジレンマで世界を「満たす」のである。

われわれの第二の命題は、世界政治におけるほとんどの地政学論は実践的なものであって、形式的なタイプではないということである。実践的な地政学論とは、場所とその特定のアイデンティティについての合意されているが注目されていない前提による理解の仕方である。これは、国政に携わる人々や政治家、政治屋、軍司令官といった人々の理解の仕方である。これは、市民社会で働き、国政を導くための諸理念と諸原則の高度にコード化されたシステムをうみだす（例えば、「地政学的伝統」にみられる人々のような）戦略家や公的な知識人による形式的な地政学論とは対比されるべきである。こうした人々による知の形式は、主張や記述、議論の高度に形式化された規則になりがちである。対照的に実践的な地政学論は、社会的神話にみら

れるような物語や二分法的区分に基づく常識的な型となりがちである。植民地的言説の場合には、白人と非白人、文明人と未開人、西洋と非西洋、大人と子どもといった対照性がある。帝国の時代におけるヨーロッパの外交政策に、そのような区別がみられたことはよく知られている (Kiernan, 1969; Gates, 1985)。19世紀後半から20世紀初期にかけてのフィリピンやラテンアメリカに対するアメリカ合州国の外交政策にもそのような区分が充満している (Black, 1988; Hunt, 1987; Kamow, 1989)。冷戦期の言説においては、トルーマン Truman が1947年3月にだした有名なトルーマン・ドクトリンにコード化されているように、この対照性は、多数派に対して強制的に押し付けられた少数派の意志に基づく生活様式に対する多数派の意志に基づき、自由な制度、代議政体、自由選挙、個人の自由の保証、言論宗教の自由、政治的抑圧からの自由によって特徴づけられる生活様式という、二つの生活様式の間にもみられた。前者の生活様式は、テコや抑圧、統制された新聞とラジオ、制限選挙、そして個人の自由の抑圧に基づくものであった。戦後の時期には、そのような基準で場所が判断され、異なる地理的陣営へと空間的に区分されたのである。

第三の命題は、地政学論の研究が、特定の国内や近代世界システム内の地理的知の生産に関する研究を必然的に伴うということである。地理的知は国民国家だけでなく、世界政治社会のさまざまな場所という多様性において生産される。教室から居間に至るまで、新聞社の事務所から映画スタジオに至るまで、教会の説教壇から大統領執務室に至るまで、世界に関する地理的知は生産され、再生産され、修正されている。地政学研究者に対する挑戦は、地理的知が国政に携わる識者による変形された地政学論へとどのように変えられていくのかを理解することである。どのようにして場所は、安全保障の必需品すなわち、複雑な現実において理解されるよりもむしろ「教化され」たり、支配されたり、侵略されたり、爆撃されたりする必要のある地理的な抽象化へと変形されるのだろうか。例えばトルーマンは、当時複雑な内戦の場であった1947年3月のギリシアの状況を、トルーマン・ドクトリンというマニ教的な二元論へとどのように変質させたのか。予想される答えは、「場所の事実」としての常識的な地理の意味を与えられるというかなり皮肉なものであ

る。つまり、地政学論は、制御可能な地政学的抽象化を好む場所の複雑な地理的現実の活発な抑圧によって作用するのである。

第四の命題は、近代世界システムの文脈での地政学論の作用に関わるものである。近代世界システムの歴史を通じて、とりわけ覇権を争うような中核諸国の国政に携わる識者たちは、国際政治の空間がどのように表象されるかについてきわめて大きな影響力と権力をもってきた。戦後間もない頃の合州国のように覇権的な世界大国は、定義からすれば、世界社会に対する「ルールの作成者」である。確かな方法で世界政治を代表する覇権大国の国力はその物質力に一致するのである。覇権国家の諸制度内で権力をもつ人々は、世界政治の長老、国際問題の管理者、規制者、地理学者となる。彼らの力は、地政学的世界秩序を構成する力であり、特殊な方法で国際政治の中心的なドラマを定義する国際空間の秩序である。このように彼らは、その原因がきわめて局地的なものであるような特定の紛争（たとえば、ギリシアの内戦）を自らの言葉で表現できるし、それによって周辺諸国や半周辺諸国が覇権国の地政学論を積極的に採用し用いるような諸条件を創り出すこともできる。このことの例は、特定の国々において「共産主義」を抑圧するために法律を制度化したり（その国に組織化された共産主義運動が見られなくともである。つまり、それらの法律は広範な反対運動を抑圧するための方法にすぎないのである。たとえば、エルサルバドルの事例がそうである。）、国際機構やフォーラムにおいて容認された冷戦という言説がいたずらに繰り返されたりと、広範囲にわたる。

#### アメリカの外交政策にみられる実践的な地政学論

このように地政学が再概念化されると、アメリカの地政学に関するどんな分析も必然的に（マハン、スパイクマン、キッシンジャー、その他の）戦略の「賢人」たちによる形式的な地政学論の分析以上のものとなるにちがいない。アメリカの地政学とはさまざまな歴史的手段の研究に関わるものであり、それによって合州国の国政に携わる識者たちが国際政治を空間化し、それを特定のタイプの場所や人々やドラマによって特徴づけられたひとつの「世界」として表象するのである。これは明らかに大仕事であるので、ここではアメリカ

の地政学論の概略についての意見を三つだけ述べたい。しかしながらそうする前に、アメリカの事例について二つの要素に注目することが重要である。第一にわれわれは、(国際的には合州国が世界大国となって以来)合州国内における国際政治に関する意味集合において大統領という地位が演じる重要な役割を認識しなければならない。民族誌的用語では、合州国大統領はアメリカ的政治生活の主要な便利屋bricoleurであり、語り部と部族的な呪術師を組み合わせた存在である。ホワイトハウスからの言説的契機をメディアが優先するという事実からもわかるように、制度と関連づけられて尊厳と歴史と儀式とを備えた大統領という地位がもつ偉大な権力の一つは、叙述し、表象し、解釈し、割り当てのための権力である。それは恐ろしい権力ではあるが絶対的なものではない。というのも、(例えば、レーガンReagan大統領がニカラグアのコントラを「建国の父と道徳的に等しい」ものとして表象するように)記述と割り当てを行うには、議会、既存のメディア、そしてアメリカの大衆と同調しなければならないからである。そのような同調が発生すると、たとえそれらが利用される社会歴史的文脈が劇的に変化したとしても、ある主題とイメージが反復され再循環されることがしばしば必要となる。「戦略的用語」(Turton, 1984)、「鍵となるメタファー」(Crocker, 1977)、「鍵となるシンボル」(Herzfeld, 1982)といったものを地政学論に合体させることによって、連続性が意図的に生産されるのである。これらすべての背後には、ある程度固定的な用語や語句を利用した割り当ての力が想定されている(Parkin, 1978)。

第二に、世界政治へのアメリカの関与が、グラムシが「アメリカ主義」と呼んだような、独特の文化的論理や一連の前提条件および方向づけとに従ってきたことを、われわれは認識しなければならない(De Grazia, 1984-85)。特に、「自由な」産業活動とそのために必要な政治条件という形式の経済的自由は、アメリカの文化の中心的要素であった。これは、アメリカ的なイメージで外国の場所を再構成しようとする試みを生み出してきた。メキシコ、中国、中央アメリカ、カリブ海、フィリピンに対する合州国の外交政策の経験は、すべて同国外交政策のこうした基本的な特徴の証拠となるものである(Agnew, 1983; Karnow, 1989)。

アメリカの外交政策にみられる実践的な地政学的論

に関する三つの意見の第一は、場所としての「アメリカ」という表象は、広く行き渡った神話的なものであるというものである。「アメリカ」とは、現実的で物質的で境界をもった場所(すなわち本質的な領土)である。しかし、特定の空間的境界のない神話的で想像的で普遍的な観念でもある。近代初期以降、北アメリカとカリブ海地域は、ダン(Dunn, 1972, 第1章)が「境界線を越えた」場所と呼ぶように、超越的雰囲気をもっており、そこでは権力が正当性をもちヨーロッパの条約は適用されなかった。自らの伝説から、この国の起源は神話的であり、その場所は神授的である。アメリカ独立戦争を支援して1776年に書かれた有名な小冊子『コモン・センス』において、トーマス・ペインThomas Paineは次のように記している。

この新世界は、ヨーロッパのあらゆる部分から市民的および宗教的自由を求めて迫害されてきた人々のための避難場所であった。彼らは、母の優しい抱擁からではなく、怪物の残酷さからここへ逃れた…。正しいものや自然なものはすべて、分離することを願う。殺されたものの血、自然の泣き叫ぶ声は、「今こそ分かれるときだ」と叫ぶ。全能の神がイングランドとアメリカとを隔てた距離さえもが、他の者に対するある者の権威が決して神の意図したものでなかったことの、力強く当然の証明である。さらに、この大陸が発見された時期は議論に重みを加えるし、そこが植民された様式はその力を増大increases [ママ]する。本国が友好的でも安全でもないときに、あたかも全能の神が将来迫害される人々に対して気前よく避難所を開こうとしたように、アメリカの発見が改心に先行したのである。

(Paine, 1969, p. 39, pp. 40-41)

ペインの地政学論にみられる劇的な誇張は、アメリカという国の神話的起源の一部である。よく知られた想像力では、「アメリカ」は「発見された」のである。つまり、それは新しく、空っぽの、素朴な土地であり、新世界であった。こうした見方は明らかに不適当であるかもしれないが、そのような想像的な地理はいまだに現代アメリカの政治文化や合州国の外交政策の表明にみられるのである。それから210年以上も経って、ニカラグアのコントラを支援する声明を国民に対して行った1988年の2月の演説の中で、ロナルド・レーガン大統領は次のように述べた。

わが友よ、わたしは全能の神が偉大ですぐれた土地、二

つの大洋の間にある、ここ「新世界」を位置づけたのには理由があると信じていることをしばしば表明してきました。両大洋で護られることで、われわれは平和の恵みを楽しんでおり、わが本土への外国の侵略という悲劇からおよそ二世紀の間解放されています。この貴重な贈り物を確保し続けることを助け給え。われわれが大事にしているのと同じ自由のために闘う人々を支援することを助け給え。そうすることで、われわれは彼らだけを助けるわけではないのです。われわれ自身、われわれの子ども、そして世界中の人々を助けることになるのです。アメリカはなお希望の光であり、国民への灯火であることを示せるでしょう。そうです。そのような希望を示す偉大な機会、この国やこの大陸ではなお明るく燃え続けており、何世紀にもわたって光明を投げかけ、なお伝導を行っているのです——平和と自由の未来のために。

(Reagan, 1988, p. 35)

二つのテキストの間にみられる連続性は、アメリカの政治的言説にみられる特定の物語の持続性を証明するものである。この物語のことを、「深層構造」を持つものだとか、他のすべてが還元されるような（例えば、旧世界対新世界、専制主義ないしは全体主義対自由主義といった）二項対立の原型だとみなすのは構造主義的な誤りである。ある言説としてその存在は仮想的であり非現実的だし、大統領や他の国政に携わる識者によってさまざまに集められ、再収集される。そのような言説は、何も他とは区別できない理解の仕方を生み出すために、容易に事実を虚構と、現実を想像と融合させる<sup>2)</sup>。いずれの物語も原始的で民族誌的な話のように読める。すなわち、他の部族から迫害された人々の放浪に始まるある部族の起源、迫害からの逃走、選ばれた土地、神の手引き、恵み、神からの貴重な贈り物、狼煙、そして猛獣といったものである。アメリカの初期の指導者たちは、今日でも「建国の父」としてアメリカ的政治文化において知られている。

第二に、どこにでもあるありふれた「アメリカ」のイメージと、それとは異なる空間的に区切られた場所のイメージとの間には緊張がみられる。一方で、アメリカの言説は一貫して「アメリカ」の独自の地理的位置において演じられる。しかし他方で同時に、それはこの「新世界」の原則が普遍的であり、空間的にそこに限定されないことを主張する。アメリカの独立宣言によって喚起されたその地理は、大陸的でも半球的でなく、世界的である。その関心は、「地球」、「万

物の法則と万物の神」、そして「人類」すべてに関わるものである。この普遍主義的視点において、「アメリカ」は、普遍的な人間性の努力のたまものと同等に位置づけられる。「アメリカの大義名分は、大いに人類すべての大義名分となる」とペイン (Paine, 1969, p. 23) は主張した。そのためにアメリカが闘う自由とは、レーガンの言葉によれば、「世界のすべての人々」が望む自由である。「アメリカ」とは、領域的に定義された国であり、普遍的な理念であり、北アメリカ大陸にある場所であり、神話的な自由の祖国でもある。

18世紀後半と19世紀のほとんどの間、空間的に区切られた意味での「アメリカ」は、合州国外交政策のレトリックにおいて支配的なものであった。たとえ合州国が他の地域以上にヨーロッパと経済的、文化的、政治的に結びついていても、その外交政策のレトリックにおいては、ヨーロッパは異なった別の領域であると定義されていたのである。ジョージ・ワシントン George Washington は1796年の最終演説で次のように述べた。「ヨーロッパのわれわれに対する関心は、まったくないかきわめて疎遠な関係でしかありません。それゆえ、ヨーロッパは、その原因がわれわれの関心とは基本的に無関係なものと、ひんぱんに巻き込まれるにちがいません」(Richardson, 1905, vol. I, 214)。ワシントンの地政学論はかなり否定的なもので、完全で自らに対するシステムというよりむしろ、(ペルシャとトルコのように) 超ヨーロッパ的なものとしてアメリカの領域を定義するものであった。他の人々、トーマス・ジェファソン Thomas Jefferson、ヘンリー・クレイ Henry Clay、そしてジョン・クインシー・アダムス John Quincy Adams にとっては、はっきりとした「アメリカ的システム」があった。ジェファソンは1813年に地理学者のアレクサンダー・フォン・フンボルト Alexander von Humboldt に対して、反乱（それは1822年に合州国政府が認めたもので、それ以前の認知運動は失敗した）を起こした五つのスペイン系アメリカ人の居住地について手紙を書いているが、その中で以下のように述べている。

しかし、彼らが最終的にどの政府に帰属するにしても、彼らはアメリカの政府となるでしょう。止むことのないヨーロッパの争いに巻き込まれることはもはやないでしょう。ヨーロッパ人の国々は地球の別の部分を構成しており、彼らの場所はそれを別のシステムの一部としてい

るのです。彼らは自らの利害を持ち、われわれの問題はそこに関わらないことなのです。アメリカは自らの半球をもっています。アメリカは別の利害システムを持たねばなりません。それがヨーロッパの利害に従属することなどありえないのです。

(Whitaker, 1954, p. 29 による引用)

しかしながら「アメリカ的システム」は、多国間主義でも、汎アメリカ的問題でも、ヘンリー・クレイが1821年に示唆したような神聖同盟に「対置されるもの」でもなかった。ジョン・クインシー・アダムスはそのような政策に積極的に反対したものの、(イギリスや南アメリカ諸国と協調して)合州国の側のどんな多国間的動きにも反対するほどには孤立主義を主張しなかった。彼の立場は一方向主義であり、孤立主義ではなかった。1820年に彼はモンローMonroe大統領に手紙を書いた。

アメリカ的システムについて言えば、われわれはそれをもっております。われわれはそれの全体を構成しております。南北アメリカの間に共通の利害と原則をもつ共同体など存在しないのです。トレスTorresとボリバルBolivar、オヒガーO'Higgerは、コレアCorrea神父と同じほどアメリカ的システムについて話しておりますが、そうしたシステムに対する基礎など存在しないのです。

(Bemis, 1945, p. 367 の引用による)

後にモンロー宣言として知られるようになるこの一方向主義的な宣言は、ヨーロッパ諸国の政治システムがアメリカのそれとは異なると述べる立場を断言するものであった。それゆえに、合州国は「この半球のいずれの部分に対しても、彼らのシステムを拡大しようとする彼らの試みを、われわれの平和と安全にとって危険なものとみなす」であろう。もちろん「アメリカの半球」とは恣意的な社会的構成物であった。というのは、(例えば、北半球や、いわゆる西半球や陸半球のように; Boggs, 1945 参照) 半球の中心をどこに置こうとするのかによって、合州国は多くの異なる半球のなかに位置づけられるからである。そのような地政学論は想像的なもので、南アメリカのラテン系共和国と北の同様に想像的な白人のアングロサクソン系共和国との間の仮想的な類似性の絆であった。

19世紀末までに、ヨーロッパ列強間の植民地の争奪戦とともに、合州国の富と国力は増大し、合州国の半

球的アイデンティティを人種、文明、キリスト教に関連した普遍的テーマとアイデンティティに従属させるような外交政策が出現した。マッキンリーMcKinleyは神の啓示の下で行動しながら、フィリピン(同時にそれが商業上のライバルであるフランスやドイツの手に落ちるのを防ぎながら; Lafeber, 1963)を向上させ文明化することが合州国の任務であるとみなしていた。その一方で、ルーズベルトRooseveltの有名な1904年の「当然の帰結corollary」が宣言された。

長期にわたる悪事、あるいは文明化された社会の結束の一般的緩みとなるような無力は、アメリカにおいては、他のどこかと同様に、最終的に文明化された国家による干渉を必要とするかもしれません。そして西半球でモンロー宣言に合州国が執着すると、目に余るほどの悪行や無力性において、どれほど気が進まないにしても、国際的警察力の行使を強いられることになるかもしれません。

(Richardson, 1905, vol. IX, p. 7053)

地政学論によって国内の奴隷制や合州国の大陸的拡大主義が作用した場合もある。すなわち、非文明的な領土に対する文明化された領土、すぐれた人種と劣った人種、白人のアングロサクソンを成人とする成人と子供という人々の区別、といったものが白人によるグローバルな政治空間を記述するのに利用されたのである。合州国はもはや「アメリカの半球」に適用されない、「諸原則」をもつ「世界大国」と自らをみなすようになっていた。マッキンリーとセオドア・ルーズベルトによる人種観はウッドロウ・ウィルソンWoodrow Wilsonの改革運動に引き継がれ、彼と合州国の政治文化が民主主義とみなすものが追求されたのである。成功することのなかったこのウィルソンの国際主義は、部分的には、孤立主義的な「アメリカ」が真の純粋な「アメリカ」であるという神話の再活性化によるものであった。にもかかわらず、1930年代の合州国は世界のその他との政治的同盟を避けながらも、その企業は引き続き長年にわたる海外への経済的拡大主義をとることとなったのである。トルーマン・ドクトリンの時期には、合州国はもはや自らを一つの世界大国ではなく世界大国そのものとして概念化した。先に述べたように、トルーマンの地政学論は抽象的で普遍的であった。封じ込めにははっきりと概念化された地理的境界はなかった。その真の空間は抽象的で普遍的な等方性の平面であり、そこにおいて正義が悪と永久に戦い、



自由が全体主義と戦い、アメリカ主義が非アメリカ主義の勢力と戦うのである。

アメリカ的言説の第三の特徴は、「自己」の空間と「他者」の空間との間に引かれる強力な線である (Todorov, 1984; Dalby, 1988, 1990a, 1990b)。多くの国家に文化地図があるように、アメリカの政治的言説は、ターナー (Turner, 1920) の言葉で言えば、文明社会を野蛮から分け隔てるフロンティアや、自由世界を「悪魔の帝国」と区分する「鉄のカーテン」によって形作られている。ロバートソン (Robertson, 1980, p. 92) は次のように述べる。

フロンティアと境界線はアメリカ人にとって強力なシンボルである。移動するフロンティアは決して地理的な線だけではなかった。それは野生と文明とを分かち明白な障壁であった。それは信念と理念をもつアメリカ人を、予測や信用のできない「他者」である野蛮人や異人から区別するものであった。それはアメリカ国民を他の国民から峻別し、その独立の証となるものであった。

そのような指摘は妥当ではあるものの、こうした実践がアメリカ人のみに見られる唯一の特徴だと強調しすぎるくらいがある。初期のヨーロッパ人の経験、特に「異教徒」に対するイベリア半島のレコンキスタや、アイルランドの「異教徒」に対するイングランド人の植民経験は、合州国における「生活様式」としての帝国主義の形成過程にみられた諸要因であった (Meinig, 1986; Williams, 1980)。すでに述べたように、植民地主義に関するヨーロッパ的な言説は、セオドア・ルーズベルトの時代ばかりでなく戦後世界の形成の決定においてさえ、合州国の外交政策の実践に認められる。1940年代後半の合州国の外交政策にみられた地政学的世界秩序形成の諸過程は、詳しく検討してみる価値がある。テイラー (Taylor, 1990) は、1945年における (おもにチャーチル Churchill、ベヴィン Bevin、イギリス外務省といった) イギリスの国政に携わる識者たちの実践的な地政学論について述べている。そこで、この時期の二つの最も有名なアメリカのテキストの例、すなわちジョージ・ケナンの「長電報」と「ミスターX」論文とを考察してみよう。

ジョージ・ケナンは、アメリカの外交政策史を飾る人物である。というのも、冷戦の言説となるものの中核的な諸要素をコード化し構成するのを促進したのが、

ほかならぬケナンその人であったからである。ステファンソン (Stephanson, 1989, p. 157) が述べるように、ケナン自身は北側の人間であり、彼にとって、第三世界の非常に異質な領域は「異国の空間であり、全体的に魅力に欠け、疑いなく自らを悲劇的な運命へと委ねるもの」であった。ケナンと大西洋の安全保障共同体を構築した他の人々にとって、世界の最も重要な区分は、西側と東側、海洋貿易的で民主主義的な世界とオリエント的で排他的な近代的独裁政治の世界というものであった。プリンストン大学とドイツとエストニアで知的訓練を受けて、ケナンは旧世界的世界観 *weltanschauung* を発展させ、これをソ連と世界政治に関する彼の初期の分析にもちこんだ。それはモスクワの合州国大使館で働き、後にワシントンDCにある国務省政策企画委員会の部長として働いていたときであった。ケナンの二つのテキストには、それによってソ連が表象されるような異なる戦略を少なくとも三つ認めることができる。それぞれ詳しく分析してみよう。

#### オリエント的なものとしてのソ連

サイード (Said, 1978, p. 12) が述べるように、オリエンタリズムとは二つの相容れない世界、すなわちオリエントとオクシデントで構成されるような、素朴な地政学的世界認識を前提にする。ケナンと彼によってコード化された冷戦の言説にとって、ソ連は「他者」の世界、オリエント的な世界の一部である。その有名な「長電報」において、ケナンはソビエト政府を「オリエント的な秘密主義と陰謀をもった雰囲気」に満ちあふれていると述べている。1947年7月に『フォーリン・アフェアーズ *Foreign Affairs*』誌に掲載された「ミスターX」論文では、彼は「ソ連勢力の政治的性格」は「イデオロギーと境遇の産物」であり、後者がロシアの地理と歴史の特質であるという彼の主張を述べている。すなわち、

レーニン Lenin 自身の真の教えは、共産主義の諸目的の追求に大いなる警戒と柔軟性を必要としている。再び、これらの教えはロシアの歴史、すなわち広大で無防備な平原をめぐって遊牧民の諸勢力が何百年にもわたって目立たない戦闘を繰り返したという歴史の教訓によって強化されるのである。ここに警戒、慎重さ、柔軟性、欺きが価値ある資質となり、それらの価値の当然の評価はロシア人や東洋人の精神に見られるのである。

(Kennan, 1947, p. 574)

この引用の前の一節において、ケナンはソ連の指導者を被害妄想と記していた。「彼らの特殊な種類の狂信的行為はあまりにどう猛であまりに嫉妬深いので、未永く権力の共有が図られるのは不可能である」と彼は記している。さらに意味深い文章の中で、彼は次のように書いている。「彼らが出現したロシア的なアジアの世界から、彼らは競合する勢力との永久的で平和的な共存の可能性に関する懐疑主義を携えてきた」(Kennan, 1947, p. 570)。ピーツ(Pietz, 1988)は、ケナンがその形成を促した冷戦の言説は、それが引用したという意味で「ポスト植民地主義的」であり、オリエンタリズムのように多くの親しまれ普及した植民地的言説や、非西洋的地域と空間の推測による素朴さから組み立てられていると記した。冷戦の言説の理論的支柱であった全体主義は、「伝統的なオリエンタ的専制政治に近代警察技術を加えたものに他ならない」ものとして知られるようになった(Pietz, 1988, p. 58)<sup>3)</sup>。

### 潜在的な強姦者としてのソ連

冷戦の言説とソ連の表象とが組み立てられているもう一つの既存の源は、家父長的な神話、とりわけ無防備の女性、レイプ、防御性といった話に関わるものであった。この時期のソ連と共産主義をめぐって構築されていた記述には、挿入のイメージがしばしば喚起される<sup>4)</sup>。ソ連の指導者たちは「欲求不満で」、「不満だらけの」運命にあり、彼らは「自らの本能的欲望のためにきわめて都合のよい合理性をマルクス主義理論のなかに見いだしていた」(Kennan, 1947, p. 569)。マルクス主義は本質的にむき出しの本能的欲望で覆われた道徳的で知的な責任の「イチジクの葉」にすぎなかった。この本能的欲望は、(ソ連に関して好んでよく使われるもう一つの冷戦的記述である)ソビエトの「侵略性」と、「ロシア人支配者の自然的で本能的な衝動を伴うロシアの警察力の限界を超えるための流動的かつ一定の圧力」とをもたらした。

こうした本能的な行動に直面して、合州国は、ソ連が「その存在によって魅惑されたり説得されたりすることなどありえない」ことに気づく必要があった(Kennan, 1947, p. 576)。ソ連には、西側諸国、とりわけ物欲しそうな考えにさらされ、無防備で心理的に

弱い西ヨーロッパに言い寄るために、(例えば平和的共存といった)様々に異なる「戦術的策略」を使用する、ずる賢くて柔軟性に富む力があつた。このような状況において、合州国の政策は、「長期的で辛抱強いが、断固として警戒を怠らないでロシアの拡大傾向を封じ込めるもの」である必要があつた(Kennan, 1947, p. 575)。合州国は、タフで男らしい西ヨーロッパの保護者を演じる必要があつた。もし「ソビエトの政策の変化と戦術展開とに応じて、絶えず変化する地理的および政治的に重要な諸地点において、対抗勢力を巧妙で油断なく適用」する政策が、合州国によって根気強く続けられたならば、ソ連自身の弱点が明らかになったであろう。性的なわかりやすさのグリッドをソ連そのものに向けて、ケナン(Kennan, 1947, p. 578)は、ソ連社会を特徴づけるものの欠如が改められない限り、「ロシアは、その熱狂性を輸出しその素朴な政治的活力の奇妙な魅力を放出することはできるが、真の意味での物質的な力と繁栄とによってそれらの輸出品をバックアップすることはできないような、経済的に傷つきやすく、ある意味では性的不能な国家であり続けるだろう」、と書いた。こうしたイメージが持続していることの証拠は、ブッシュBush政権のレトリックに見られる。そこでは、ゴルバチョフGorbachevの外交政策が西ヨーロッパの「誘惑」を目的とした「魅力的攻撃」であると言われていたのである。

### 赤い洪水

前述の家父長的神話と並んで、ソビエトの外交政策と共産主義を洪水と表現することも繰り返されてきた。赤い洪水というイメージは戦間期のファシストの神話においてとりわけ力強かつた要素である。そこでは、ワイマール期のドイツでテウエライト(Theuleit, 1987, p. 230)が記しているように、力強いメタファーが「明らかに不釣り合いな興奮状態を発生させていた。それは脅威であると同時に魅力的でもあつた…」。多くの異なる諸要素がここでは演じられる。すなわち、状況と境界は流動的であり、固い大地が柔らかくかつ泥のようになり、防護柵が破られ、抑えられていた本能が外へと溢れ出し——無意識な象徴、規律のないイドとしての水と海——、そして諸条件は抑制されず、無政府的で危険なものとなる。テウエライトの説明では、

義勇兵の反応は、この無政府的で墮落した社会に対する堅固で直立したダムとして振る舞うことである。固い大地に両足をしっかりと植え付けられて、彼らは赤い血を封じ込め、流れ出すすべてのものに死をもたらしたのである。結局、社会の真の土台が攻撃にさらされていたのである。ケナンの「ミスターX」論文に目を転じると、西ヨーロッパに対するソビエトの脅威のまさに本質を定義する、次のような写実的な文章を見ることができる。

その（ソ連の）政治行動は、移動できる場所ならどこにでも、与えられた目標に向かって絶えず動く流動的な流れである。その主要な関心事は、世界勢力という水ばちを利用できるように、確実に隅々まで満たすことである。しかし、もしその行方に難攻不落の障害が見つければ、それを哲学的に受け入れ、自らをそれに適応させる。その主要なもの、欲する目標に向かって、絶えず止むことのない圧力が存在すべきだということである。

(Kennan, 1947, p. 575)

洪水のイメージは、（無制限に噴き出す欲望などのような）性的な次元をも持っており、重要である。というのは、封じ込めの地理が構成されるのはこうした諸手段だからである。ソ連の脅威が洪水という特徴をもつならば、ソ連の国境のすべてに沿って「堅固で油断のない封じ込め」が必要となる。このように封じ込めは、事実上世界的規模であり、単に西ヨーロッパだけの課題ではないものとして構成される。だからシナリオが展開すれば、西ヨーロッパでの効果的な封じ込めは、中東とアジアでのソ連に対する圧力の増大につながる。これらの地域のいくつかでは、事実上ソ連が溢れ出す結果となった。そのようなイメージは、赤い血が外側へとあふれ出すソ連の地図や、うち破ろうとして威嚇的に貫通する矢のように、適切な図で視覚に訴えることによって容易に強化されていった。合州国の安全保障担当官が、なぜ北朝鮮の韓国への侵攻がソ連の拡大主義的行動であると本能的に理解するのかを説明するには、確かにそうした既存のイメージとシナリオの力に注目せざるをえない。さまざまな封じ込め戦略（Gaddis, 1983）に見られる形式的な地政学論は、幅広く共有された実践的な地政学的先入観というもろい土台に基づくのではないかと、と思われる<sup>9)</sup>。

## 結論

言説としての冷戦は、1989年の数々の事件の結果としてその信用性と意味とを喪失してしまったのかもしれない。しかし、少なくとも西側において国政に携わる識者と彼らの背後にいる軍産複合体が、再構築された世界秩序のなかに（「非合理的な第三世界の君主」のような）一連の「新しい」敵を創出しようとすることは、湾岸危機からも明らかである。ブッシュ大統領とサッチャー首相によって、1990年から91年にかけての湾岸危機で使用された実践的な地政学論の還元主義的な性質は、すべてがあまりにもよく知られているように見える。外国の場所と外国の敵の特徴は、固定的なものとして表象される。合州国によるソ連の扱いに「共通の精神的アプローチに訴えることなどありえない」（Kennan, 1947, p. 574）、と1947年にジョージ・ケナンが宣言したとき、彼は彼自身の専門、すなわち外交を有効に否定していた。ソ連と合州国の間での開かれた対話の可能性がアプリアリに排除されたのは、ソ連の性格が既に歴史的にも地理的にも決定されており、事実上変えられないからであった。場所の実践的な地政学的表象が皮肉なのは、成功のためには、社会的実体としての場所の多様性と複雑性についての正真正銘の地理的知を実際に捨てる必要があるということである。さらにソ連（あるいは今日のイラク）をオリエント主義者と述べることは、地理的抽象主義という行為となる。複雑で多様で異質な場所の社会的モザイクが、単一的で、信念が固すぎ、予測可能な行為者へと実体化される。したがってその結果、合州国は、ソ連（あるいは今日のイラク）に関して同時に恐ろしいほど地理的に無知であるにもかかわらず、世界政治においてはそうした国家とその影響力については盲目的に占有されているという皮肉な状況に置かれるのである。

今日における地球的規模での経済的、政治的な再構成は、地理的感受性の変化の結果であり発生でもある。今日の遠隔通信と資本、イデオロギー、文化のグローバリゼーションによって形づくられた著しい「時空間の圧縮」は、場所の運命をより親密なものに束ねてしまう。しかしそれは、各々の場所間に新しいタイプの主観性と新しい形式の政治的連帯の可能性をも切り開いたのである（Agnew and Corbridge, 1989）。グロー

バリゼーションは、ある批判的社会運動が、その闘いをきわめて異なった場所における他の批判的社会運動の闘いと結びつけることを可能にする（例えば、Kaldor and Falk, 1987; Walker, 1988 参照）。自らの用語を脱構築し、諸国内で循環する実践的な地政学論の形式を批判的に探求している今日の地理学は、こうした批判的社会運動に対する一つの同盟者となりうる。それは、還元的な地政学論ではなく、批判的な地理的知に基づいた世界の記述を創りだすのに役立つのである。

## 謝辞

本稿は、1987年4月にワシントンDCで開かれた国際研究協会の年次大会の、「政治地理学と地政学：その今日的ペースベクティブ」というセッションにおいて報告した「アメリカ地政学の歴史」で初めて展開した議論に基づいている。その報告とその修正版である「地政学的秩序と国内化された空間：アメリカ地政学の批判的歴史に向けて」は幅広く普及している。

## 注

- 1) 政治地理学においてフリーコーと批判的な国際関係の理論を用いようと試みる際には、大まかに「地政学の言説」とか「地政学的言説」と言う傾向がある。そのような言い方は役に立たない。というのも、地政学が別個の言説そのものであることをそれらは示すからである。われわれが主張しようとするのはこのことではない。外交政策の実践に言説を使用する結果生じる国際政治の空間化を述べるために、われわれは「地政学論」という用語を用いたい。
- 2) ジャン・ボードリヤール (Jean Baudrillard, 1988, p. 7) は、アメリカのことを「唯一残る原始的な社会」、すなわち「自らの道徳的、社会的、生態的な論理的根拠を遥かに凌駕する」ようなひどい儀式主義と誇張された原始主義の社会、と呼んでいる。アメリカの神話にみられる生活の政治的および経済的現実に関する議論については、デイビス (Davis, 1986) を参照。
- 3) 政策企画委員会部長としてのケナンの後継者はポール・ニツェ Paul Nitze であった。安全保障の言説において知られているように、合州国が水爆もしくは「スーパー」を開発する必要性を説きながら、ニツェは「西ヨーロッパに対する脅威は、イスラム勢力がそのイデオロギー的熱意と好

戦的な力を組み合わせて、何世紀も前から持っていたものと奇妙にも似ているように、私には思われる」と論じた (ニツェ、Talbot, 1989, p. 52の引用による)。文明人と野蛮人の群れとの戦いという物語で、国政に携わる識者に古典的な教育を行うことの影響は (Luttwak, 1976 参照)、さらに検討する価値があるように思われる。この分野の研究は、この時期の安全保障共同体の要素に対するマッキンダーの理念の魅力を説明するのに役立つかもしれない。

- 4) 回想録の第一巻 (Kennan, 1967) によれば、ケナンはソ連に対する彼の初期の概念の多くを恐らくこの時期までに否定している。それにもかかわらず、ソビエトの力という議論においては、挿入というイメージに繰り返し戻るのである。
- 5) 他の一連の戦略が存在し、それらによって、ケナンと他の多くの人々によってコード化された初期の冷戦的言説において、ソ連は表象されたのである。医学的用語で領域と国家を記述すると、(例えば、西ヨーロッパを病気に対する手助けを必要とする弱い患者と述べるように) ある地域の医学化を促進するし、(例えば、ソ連を偏執狂的な人格として述べるように) 他者を述べるのに心理学的用語を使うことになる。

## 文献

- Agnew, J. A. (1983): An excess of 'national exceptionalism': towards a new political geography of American foreign policy. *Political Geography Quarterly* 2, 151-166.
- Agnew, J. A. and Corbridge, S. (1989): The new geopolitics: the dynamics of geopolitical disorder. In Johnston, R. J. and Taylor, P. J. eds. *A World in Crisis?: Geographical Perspectives*. Oxford, Basil Blackwell, 266-288.
- Alker, H. and Sylvan, D. (1986): Political discourse analysis. Paper presented at the Annual Meeting of the American Political Science Association, Washington DC, September.
- Ashley, R. (1987): The geopolitics of geopolitical space: towards a critical social theory of international politics. *Alternatives* 14, 403-434.
- Augelli, E. and Murphy, C. (1988): *America's Quest for Supremacy and the Third World: An Essay in Gramscian Analysis*. London, Pinter.
- Bassin, M. (1987): Race contra space: the conflict between German *Geopolitik* and national socialism. *Political Geography Quarterly* 6, 115-134.
- Baudrillard, J. (1988): *America*. New York, Verso. ボードリヤール, J. 著, 田中正人訳 (1988) : 『アメリカ——砂漠よ永遠に』法政大学出版局.
- Bemis, S. (1945): *John Quincy Adams and the Foundations of American Foreign Policy*. New York, Alfred A. Knopf.
- Black, G. (1988): *The Good Neighbor: How the United States Wrote*

- the History of Latin America*. New York, Pantheon.
- Boggs, S. (1945): This hemisphere. *Department of State Bulletin* 6 May.
- Cockburn, A. (1987): The defence intellectual: Edward N. Luttwak. *Grand Street* 6(3), 161-174.
- Crabb, C. (1982): *The Doctrines of American Foreign Policy*. Baton Rouge, Louisiana State University Press.
- Crocker, J. C. (1977): The social functions of rhetorical forms. In Sapir, J. D. and Crocker, J. C. eds. *The Social Use of Metaphor: Essays on the Anthropology of Rhetoric*. Philadelphia, University of Pennsylvania Press, 33-66.
- Dalby, S. (1988): Geopolitical discourse: the Soviet Union as Other. *Alternatives* 13, 415-442.
- Dalby, S. (1990a): American security discourse: the persistence of geopolitics. *Political Geography Quarterly* 9, 171-188.
- Dalby, S. (1990b): *Creating the Second Cold War: The Discourse of Politics*. London, Pinter.
- Davis, M. (1986): *Prisoners of the American Dream*. London, Verso.
- De Grazia, V. (1984-85): Americanismo d'Esportazione. *La Critica Sociologica* 71-72, 5-22.
- Der Derian, J. and Shapiro, M., eds. (1989): *International/Intertextual Relations*. Lexington, Mass, Lexington Books.
- Dunn, R. S. (1972): *Sugar and Slaves: The Rise of the Planter Class in the English West Indies, 1624-1713*. New York, Norton.
- Etzold, T. and Gaddis, J. (1978): *Containment: Documents on American Policy and Strategy, 1945-1950*. New York, Columbia University Press.
- Foucault, M. (1980): *Power/Knowledge*. New York, Pantheon.
- Franck, T. M. and Weisband, E. (1971): *Word Politics: Verbal Strategy Among the Superpowers*. New York, Oxford University Press.
- Gaddis, J. L. (1982): *Strategies of Containment*. New York, Oxford University Press.
- Gates, H. L., ed. (1985): 'Race', writing and difference. *Critical Inquiry* 12(1).
- Gramsci, A. (1971): *Selections from the Prison Notebooks*. New York, International Publishers.
- Gray, C. (1977): *The Geopolitics of the Nuclear Era*. Beverly Hills, CA, Sage Publishers.
- Gray, C. (1988): *The Geopolitics of Superpower*. Lexington, University of Kentucky Press.
- Herzfeld, M. (1982): The etymology of excuses: aspects of rhetorical performance in Greece. *American Ethnologist* 9, 644-663.
- Hunt, M. (1987): *Ideology and U. S. Foreign Policy*. New Haven, Yale University Press.
- Kaldor, M. (1990): After the Cold War. *New Left Review* 80, 25-37.
- Kaldor, M. and Falk, R. (1987): *Dealignment: A New Foreign Policy Perspective*. New York, Basil Blackwell.
- Karnow, S. (1989): *In Our Image: America's Empire in the Philippines*. New York, Random House.
- Kennan, G. (1946): The 'Long Telegram'. In Etzold, T. and Gaddis, J. eds.: *Containment: Documents on American Policy and Strategy, 1945-1950*. New York, Columbia University Press, 50-63.
- Kennan, G. [Mr. X](1947): The Sources of Soviet conduct. *Foreign Affairs* 25, 566-582.
- Kennan, G. (1967): *Memoirs 1925-1950*. Boston, Little Brown.
- Kierman, V. (1969): *The Lords of Human Kind*. Boston, Little Brown.
- Kristof, L. (1960): The origins and evolution of geopolitics. *Journal of Conflict Resolution* 4, 15-51.
- Laféber, W. (1963): *The New Empire: An Interpretation of American Expansionism, 1860-1898*. Ithaca, NY, Cornell University Press.
- Luttwak, E. (1976): *The Grand Strategy of the Roman Empire*. Baltimore, Johns Hopkins Press.
- Macdonell, D. (1986): *Theories of Discourse: An Introduction*. New York, Basil Blackwell.
- Mackinder, H. (1890): The physical basis of political geography. *The Scottish Geographical Magazine* 6, 78-84.
- Meinig, D. (1986): *The Shaping of America. Volume 1: Atlantic America, 1492-1800*. New Haven, Yale University Press.
- Ó Tuathail, G. (1989): Critical geopolitics: the social construction of place and space in the practice of statecraft. Unpublished PhD thesis, Syracuse University.
- Paine, T. (1969): *The Essential Thomas Paine*. New York, Mentor.
- Parker, G. (1985): *Western Geopolitical Thought in the Twentieth Century*. New York, St. Martin's Press.
- Parkin, D. (1978): *The Cultural Definition of Political Response*. London, Academic Press.
- Pietz, W. (1988): The 'post-colonialism' of Cold War discourse. *Social Texts* 19/20, 55-75.
- Ratzel, F. (1969): The laws of the spatial growth of states. In Kasperson, R. and Minghi, J. eds.: *The Structure of Political Geography*. 17-28, Chicago, Aldine.
- Reagan, R. (1988): Peace and democracy for the Nicaragua. Address to the Nation on February 2, 1988. *Department of State Bulletin* 88(2133), 32-35.
- Richardson, J. (1905): *A Compilation of Messages and Papers of the Presidents, 1789-1902*, 12 vols. Washington, DC, Bureau of National Literature and Art.
- Robertson, J. O. (1980): *American Myth, American Reality*. New York, Hill and Wang.
- Said, E. (1978): *Orientalism*. New York, Vintage Books. サイド, E. 著, 板垣雄三・杉田英明監修, 今沢紀子訳 (1986) : 『オリエンタリズム』 平凡社.
- Said, E. (1981): *Covering Islam*. New York, Pantheon Books. サイド, E. 著, 浅井信雄・佐藤成文訳 (1986) : 『イスラム報道—ニュースはいかに作られるか—』 みすず書房.
- Shapiro, M. (1988): *The Politics of Representation*. Madison, University of Wisconsin Press.
- Sprout, H. and Sprout, M. (1960): Geography and international politics in an era of revolutionary change. *Journal of Conflict*

- Resolution 4*, 145-161.
- Stephanson, A. (1989): *George Kennan and the Art of Foreign Policy*. Boston, Harvard University Press.
- Talbott, S. (1989): *The Master of the Game: Paul Nitze and the Nuclear Peace*. New York, Vintage Books.
- Taylor, P. J. (1989): *Political Geography: World-Economy, Nation-State and Locality*, 2nd edn. London, Longman. テイラー, P.J. 著, 高木彰彦訳(1991-2) 『世界システムの政治地理 (上・下)』 大明堂.
- Taylor, P. J. (1990): *Britain and the Cold War: 1945 as Geopolitical Transition*. London, Pinter.
- Theweleit, K. (1987): *Male Fantasies. Volume 1: Women, Floods, Bodies, History*. Minneapolis, University of Minnesota Press.
- Todorov, T. (1984): *The Conquest of America: The Question of the Other*. (Howard, R. による英訳) New York, Harper Torchbooks.
- Turner, F. J. (1920): *The Frontier in American History*. New York, Henry Holt.
- Turton, A. (1984): Limits of ideological domination and the formation of social consciousness. In Turton, A. and Tanabe, S. eds.: *History and Peasant Consciousness in South-east Asia*. Osaka, National Museum of Ethnology, Senri Ethnological Studies, No. 13.
- Walker, R. (1988): *One World, Many Worlds: Struggles for a Just World Peace*. Boulder, CO, Lynne Rienner.
- Whitaker, A. (1954): *The Western Hemisphere Idea: Its Rise and Decline*. Ithaca, Cornell University Press.
- Williams, W. A. (1980): *Empire as a Way of Life*. Oxford, Oxford University Press.
- Yanas, P. (1989): Containment discourse and the making of 'Greece'. Paper presented at the joint annual ISA and BISA Conference, London, 28 March-1 April.